

氏 名	おく の たく し 奥 野 卓 司
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 83 号
学位授与の日付	平成12年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	情報化時代における「第三の社会」に関する実証的研究 (主査)
審 査 委 員	教 授 中野 正大 教 授 大橋 良介 教 授 古山 正雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、家庭が情報化することによって、日本における家族関係がどのように変容してきたかに関して、平成5年から毎年、継続的に行われてきたインタビュー調査、および家庭からの社会参加としてインターネット上に展開されているインターネット・ビジネスの特徴のあるサイトの主宰者に対して行われた平成9年度のインタビュー調査をもとにして、家庭からも企業からも溶けだした人々が、もうひとつの「第三の社会」を形成しつつあることを論証し、そのうえで情報化時代における「第三の社会」の社会的意味を考察したものである。

本論文は4章および調査データ4編で構成されている。

「第1章 第三の社会の浮上」では、「第一の社会」(家族、ムラなどの共同体)、「第二の社会」(企業、産業社会)を隔てていた「壁」が溶け、その間に新たな「第三の社会」が生まれつつあることを、社縁やゲゼルシャフト概念などの従来の社会概念と比較しつつ、社会史の立場で概説している。

そのうえで、「第三の社会」の特徴として、その社会が、家庭での社会的役割や企業での社会的役割から離脱した、個人の関心、興味によって結ばれる選択的な人間関係から成立していることに着目し、その新しい人間関係がインターネットやモバイルメディアの発達に助けられて、ネットワーク上にだけでなく、現実世界にも、趣味にとどまらないボランティア、NPO、インターネット・ビジネス、SOHOなどとして、社会的広がりや重要性をもってきていることを論じている。

「第2章 第三の社会の家庭——家メディアから個メディアへ」では、情報メディア、とくにテレビと電話に関して、家庭で共有するメディア(家メディア)としての機能から家庭の中での個人専用のメディア(個メディア)としての機能に移行してきた過程を解説し、それにともなう家庭内の人間関係の変容について述べている。その結果、今日では、家庭は「ネットワーク家庭」として、家族のメンバーが、主婦、高齢者も含めて、家庭外で活動し、家庭外と人間関係をもつことが多くなったことを分析している。

「第3章 第三の社会——インターネット・ビジネスの展開と問題」では、産業社会に直接参画できない女性や高齢者、また大企業から自主的に離脱して起業した人々が、インターネットを使って行っている家庭内のビジネス(SOHO)をとりあげている。このインターネット・ビジネスによって、モノだけでなく、情報の生産や流通、価格決定においても、まだ課金や安全性の問題は残るものの、消費者が主導権を取り返し、従来の産業構造を転換させる可能性があることを論証している。

「第4章 第三の社会の構造と機能」では、以上の章の考察をふまえて、家庭から溶けだした主婦や高齢者、従来の企業社会から溶けだした人々が参画する「第三の社会」が、工業社会から情報社会へという時代の転換、およびそれにともなう産業構造の転換のなかで、形成しつつある社会構造とその社会的機能について、先行研究である「脱工業化社会論」や「情報社会論」との比較、およびアメリカでの観察調査

との比較から考察している。

以上の論文に添付された調査データ4編は、平成5年「情報化による家庭の変容に関するインタビュー調査」、平成6年「パソコン通信とケーブル・テレビによる家庭の変容に関するインタビュー調査——横浜市周辺における事例」、平成8年「携帯情報メディアに関する主婦・学生・ビジネスマンへのインタビュー調査」、平成9年「インターネット・ビジネスを行うホームページ主宰者へのインタビュー調査」であり、上記の各章の論述を実証するものである。

論文審査の結果の要旨

申請者は昭和53年に本学大学院繊維学研究科修士課程を修了し、その後、国立民族学博物館共同研究員、米国イリノイ大学客員準教授、甲南大学文学部教授などを経て、現在は関西学院大学社会学部教授、同大学院社会学研究科教授を務めている。また、この間、昭和61年より14年間、本学で「文化人類学」、「情報人類学」、「情報化社会論」などの非常勤講師を務めてきた。

その間、日米のパソコン少年グループへの参与観察、米国のアーミッシュ社会のフィールドワークなどを行い、米国から帰国後に本研究の構想をたて、平成5年からパソコン通信およびインターネットなどの電子メディアに関するオンラインでの調査、対面によるインタビュー調査、日米における参与観察を行って、その結果をまとめたのが本学位申請論文である。

本論文は、従来、様々な個別現象としては、社会学者らに気づかれてはしながら、実証的に確かめられたことがなかった事象を、参与観察やインタビュー調査によって実証し、それらの総体を「第三の社会」と名づけて、社会学とその周辺領域の学際的研究によって分析したことに、意義がある。

従来の社会学は、その成立時の時代背景から、家族・地域（農村・都市）・産業を社会の基本的な枠組みとして構築されてきた。だが、今日、情報化の進展によって、インターネット上の人間関係だけでなく、現実社会のネットワーク的な人間関係など、その枠組みだけでは解明しきれない社会現象が現れている。また、このことは、その現象に参加する人々にも、まだ明確に意識されたものではなく、量的にも小集団や各個人に分散しているため、社会学の基本的な調査方法である「質問紙法」（アンケートによる量的調査）では、非常に実証しにくいものとなっている。

前述したように、本論文は、こうした新しい社会現象の構造と機能を、シカゴ学派以来、小集団に分散した社会現象を詳細に記述できるとされる、質的な調査方法であるインタビュー調査および参与観察（フィールドワーク）によって明らかにし、新たに「第三の社会」と名づけて解説することを提案している。

以上のように、本論文の内容は社会学的研究ではあるものの、従来の社会学の枠組みでは収めきれない学際的な研究であり、この意味でまさに博士（学術）を授与するにふさわしい研究である。とくに、科学技術を人間の文化、社会に生かそうとする本学の研究として、学術的価値が高いことを、全審査員が認めた。

なお、本論文の内容は、筆者の単著で8編の論文として刊行され、そのうちレフリー精度のある国立民族学博物館研究論文集に1編、同博物館英文論文集（“Senri Ethnological Studies”）に1編、日本都市学会年報に1編、比較文明学会年報に1編、単著で掲載されている。

また、本論文内容を編集した単著が、『第三の社会』として岩波書店より、平成12年1月に刊行された。

さらに、国立民族学博物館の国際シンポジウム、米国ワシントン大学（シアトル）の日本研究シンポジウムに招待されて報告し、国際的な評価を受けている。

よって本審査委員会は、申請者、奥野卓司氏の提出された学位審査論文を高く評価し、本論文が本学の博士（学術）の学位を授与するに十分値するものと判断する。